

コメニウスの言語教科書はどのように使われたか

松岡 弘

1. はじめに

17世紀のチェコの教育学者ヤン・アモス・コメンスキー（ラテン名コメニウス。以下ではこれを用いる）に、よく知られた2種類のラテン語教科書がある。『開かれた言語の扉』⁽¹⁾（*Janua linguarum reserata*。以下、『扉』と略す）と『開かれた言語の扉の前庭』⁽²⁾（*Janua linguarum reserata vestibulum*。以下、『前庭』と略す）がそれで、最初に『扉』が刊行され（1631年）、続いて『前庭』が刊行された（1633年）。『前庭』は『扉』を使用する前の初心者用の入門書として作られ、コメニウス自身が『前庭』は第1学年用、『扉』は第2学年用と述べているように、学習の順序は『前庭』から『扉』へと進む。ごく大ざっぱな言い方ではあるが、『前庭』は語学教育でいわれるところの初級教科書、『扉』は中級教科書と言ってよいかと思われる。

言語教科書としての『扉』及び『前庭』の意義や、コメニウスのその他の言語教科書との関連等は、すでに井ノ口淳三氏の『コメニウス教育学の研究』⁽³⁾で詳しく論じられており、本稿も基本的にはそれを参考にし踏襲するので、ここでは論じない。筆者としては語学教師（日本語教育）の視点から、コメニウスの教科書の使われ方に焦点を当て、若干の考察を試みたい。なお、『前庭』と『扉』のみならず、コメニウスのラテン語による著作の多くは藤田輝夫氏による日本語訳があるので、特に断らない限りそれを用いる。

2. 『前庭』と『扉』の構成と内容の特徴

まずそれぞれの教科書の構成・内容と語彙の配分を見ると、『扉』は100の表題に分けられ、全世界の事柄が8000の語彙と1000の文章によって描かれる。一方『前庭』は7つの表題の下で1000の語彙と427の文章からなり、『扉』よりも内容が大幅に簡略化され文章も単純となっている。また、既出語彙の繰り返しは可能な限り避けられている。『扉』の表題名を例示的に紹介すると、最初の10章は「導入部、世界の端緒、要素について、支えについて、火について、気象について、水について、大地について、石について、金属について」であり、最後の10章（91-100）は、「忍耐について、一貫性について、友情と人間性について、誠実について、教養のある交際について、遊戯について、死と埋葬、神の摂理について、天使について、終り」となっている。『前庭』全7章の表題は「序、事物の生成について、事物

の能動と受動について、事物の状態、学校における事柄について、家の事柄について、都市と宗教における事柄について、人格について、結び」であるが、各章ごとに下位分類が施されている。この二つの教科書は、難易差や複雑単純の違いはあっても、描かれる事柄はほぼ一致している。内容的に対応する箇所を、一部例示する。

『扉』 第14章

動物について、まず鳥について

- 142. 生命、感覚、運動を備えたものは、どんなものでも動物です。
- 143. 高いところにいるものは飛び、水棲動物は翼や鰭で泳ぎ、四足獣は走り、爬虫類は這います。
- 144. 鳥類は二本足で、(極楽鳥は無足類と言われますが、獣毛と歯のあるコウモリを除いて) 羽毛と嘴があります。

(中略)

- 160. ガンはガーガー鳴きます。メンドリはグラッキル、グロッキト、グルキットと鳴きます。カモはカーカー鳴きます。イヌワシはラッパのような音を出します。コウノトリはバチバチ(グロトル)という音を出します。(後略)

『前庭』第2章中の

動物

- 80. 石は横たわり、幹は立ち、動物は自ら動きます。
- 81. 鳥は羽と翼を欲し、魚は鰭で泳ぎます。
- 82. 四足獣は歩き、蛇は蛇行し、鹿は走ります。
- 83. 馬はいななき、牛はモーと鳴き、小羊はメーと鳴きます。

(後略)

上の例示から、コメニウスの言語教科書の本文を、現代の日本語教育の領域のイメージで言い表すとすれば、『分類語彙表』や『類語辞典』の中の語彙を組み合わせ文章化したようなものと言えるかもしれない。『扉』の方は中間を省略したが、その部分には鳥の種類・名称・性質等の詳細な記述があり、さながら百科事典の観を呈している。言語教育が事物教育でもあるコメニウスの基本的な考えがそこに表れていると言えよう。

3. 『前庭』と『扉』の使い方

前節で示したような、新出語彙が次々と提出され(特に『扉』の場合)、その上テキスト的結束性の乏しい文が単調に羅列されている教科書を、コメニウスはどのように用いていたのか、あるいは用いられることを期待したのだろうか。これについてコメニウスは、『教授学論究』⁽⁴⁾(Didaktica dissertatio)の中で大変詳しい指針を与えているので、そこから関連すると思われる内容を取り出してみよう。コメニウスによると、

ラテン語学習の第1学年の目標は「ラテン語法を次々と覚えるようになること。すなわち①法則通りに発音すること。②敏速に読むこと。③正確に書くこと。④どのようになっても理解しかつ翻訳すること。⑤話を適正に区分すること。⑥類似したものを正確に変化させ活用させること。⑦子どもらしい意見を話す、等々。⑧すでにあらかじめ提示されたもの

を、とにかく文体で、模倣すること」としている。そしてそのために最初の半年間は10回教科書を読み通すこと、朝の時間は理解と記憶の練習に、午後の時間は文体と舌の練習に費やすことを求めている。

ここでコメニウスが示した目標及びやり方の中で際立って特徴的なのは、教科書、つまり『前庭』の内容を初めから終わりまで10回繰り返せという指示であろう。そうすれば確かに完全に覚え込ませるという効果は期待できるかもしれないが、学習者の興味の持続の困難等を考えると、今日はもちろん昔でも実行不可能なやり方ではなかったか、という疑問が当然生ずる。では、その繰り返しの中身はどうであったか。この10回の読み通しの作業内容についてのコメニウスの指示は次のようである。要点のみをとりだして記すと、

- 1回目：教師が朗読し、生徒に同じことをやらせる。書く練習があってもよい。
- 2回目：再度、文章を読み書きするが、その際、母語の本文によってラテン語の本文を理解する。それも文から文だけでなく語から語へも置き換えられるようにする。
- 3回目：ラテン語から母語への翻訳を繰り返す。午後の書き方練習でも同じ内容とやり方をとる。
- 4回目：本を閉じさせ、内容について質問したり、母語で提示してラテン語に翻訳させたりするが、それを教科書通りに行なう。
- 5回目：教師が文を読んで、第2、第3の語幹を説明したり、格変化の一覧表を示し、格変化の練習をする。
- 6回目：第4の語幹の朗読、読解。意識させないで活用を練習し、覚える。
- 7回目：動詞を全般的に繰り返し、受動態の用法を学ぶ。
- 8回目：教科書を復誦し、丸ごと暗記できるまでにする。午後は単数を複数にするなどの文体練習。
- 9回目：試験の実施。文法的な質問（格、数、性など）をする。午後は直接法から接続法を作るなどの文体練習。
- 10回目：生徒間でこれまでの練習を時間を区切って行なわせ、優劣を競わせる。午後は既習の範囲内の語彙を使って手紙や小話を書かせる。

次に、『扉』の使用に関わる指示であるが、ラテン語学習の第2学年の目標をコメニウスは①ラテン語の常用語彙をすべて理解し固有の意味を正確に把握すること。②意味の根拠を語源の力で再現できるようになること。③事物について適切に書いて、話せるようになること、とし、『前庭』と同様、『扉』でも10回の反復を指示している。これも要点のみを記すと、以下のとおりである。

- 1回目：正しい発音で本文の内容を予測しながら読み通す。午後は、それを母語とラテン語で書き写す。
- 2回目：事物、つまりは本文の内容を説明や実物の提示を通して理解させる。
- 3回目：教科書を閉じさせ、ラテン語の文を母語で言わせる。

- 4 回目：文法書と辞典を参照しながら、文法を正確に覚え、確認する。午後は、文法書の書き写しをする。
- 5 回目：3、4時間かけて本文を読み通すが、辞典を用いて語源を覚え、派生語や合成語を認識する。午後は辞典の書き写し。
- 6 回目：本文を読み通し、同音異義語や同義語などを手引書を使って、かつその手引書を暗誦し、書き写させる。
- 7 回目：統語法規則の学習。
- 8 回目：正しく書き、正しく発音することを綴字法と韻律学に則って求める。たとえば、1時間の間に2、3章（1頁分）を人前で朗誦させる。
- 9 回目：本文中の語彙を使いながら、内容を変えた質問及び答といった、質問を通じての論理学の学習を行なう。
- 10 回目：生徒同士に、これまでのことを競わせる。午後は、教師から与えられた内容を辞書を用いてラテン語に翻訳させる。

以上の指示に加えて、コメニウスは『扉』以外の書物を持つことを注意が散漫になるからという理由で禁じている。

『前庭』と『扉』とでは、勿論その指示内容に違いがあるが、両者に共通しているもの、それはとりもなおさずコメニウスの言語教授方法論の原則であると見なしてよいと思うが、結局は、定められた本文に沿って繰り返しを行ない、聞き、読み、書き、話すことにより、単語および文を正確な発音、そして表記で暗記し、できれば全文を暗誦できるまでにし、文法についても、形態、統語の両面において理解・発表・応用能力を育て、最終的には生徒間で（ラテン語で）自由に議論し合えるレベルにまで教育する、ということであろう。

このように並べ、まとめてみると、コメニウスの手法が非常に包括的で、かつ手堅く行き届いたものであることがわかる。近・現代の、生まれては消えていく個性的な教授法と比べれば、旧態依然たるものの典型と糾弾の対象になるかもしれないが、あまりにも陳腐で現代に合わないというような手法は、ここにはない。例えば、旧時代的として見なされがちな代表格に「真似る、繰り返す、覚える」があり、これはコメニウス教授法の基本といってもよいが、現実的に考えて、この作業を抜きにした語学の習得はあり得ず、それをまともに論じない教授法の方が、実は現実から遊離しているのである。

逆にここには、現代的といってもよい考え方をいくつも見出すことができる。そのうちの一つを挙げると、母語と翻訳の役割に対するコメニウスの見識である。第二言語学習における母語の扱いや翻訳の役割については、教授法によって両極端の対応が今なお存在するが、これも現実に照らしてみると、教師、あるいは教材の側が母語と翻訳抜きで通してみても、学習者の方は、少なくとも初級・中級段階では母語ないしは翻訳を頼りにし、それを補助的手段としている事実是否定のしようがない。コメニウスにおいてそれらに単に補助的な役割でなく積極的な意味と役割が与えられていることは、やはり重視すべきであろう。

4. 授業での実際の運用

教科書を10回繰り返すことの趣旨と各回の作業内容は前節にまとめたとおりであり、それらは理屈としては筋が通り、また10回の繰り返しと言っても、それぞれに変化があり、単純な繰り返しではないことがわかった。が、それにしても、同一の本文に沿って繰り返し教え・教えられることに、教師と生徒は耐えられるのだろうか。時代や教師と生徒の関係が現代とは異なることを考慮するにしても、実際にはこれを忠実に実行するには無理がある、と言うのが現場の教師の実感ではないか。まして意欲的な教師であればあるだけ、趣旨は生かしつつも何らかの現実的対応や工夫があるのが普通ではなからうか。

実はそのことは、コメニウス自身によっても予定されていたのであった。『扉』の第5章は「火について」という表題であるが、この本文を実際の授業でどのように生かすかの具体案を、コメニウスの友人であるダヴィト・ベヒナーが考案し、それをコメニウスが自著で取り上げているので、リントナー(1876)⁽⁹⁾からの孫引きであるが、以下に示す。(以下の引用については、『扉』の部分を含めてリントナー(1876)のドイツ語文から翻訳した)

1) 『扉』の本文は、次のようになっている。

第5章 火について

44. 火花は、ほうっておくと、火事になります。
 45. というのは、火は最初は弱く、次に赤く燃え、それから燃え上がり、そして炎を上げるからです。火は最後に燃えつきると、埃と灰になります。
 46. 燃えている薪はつけ木と呼ばれます。それを消したものが消し炭です。その一部は、木炭で、火がつけば、炭です。
 47. 燃えている煙は炎です。それが暖炉にくっつくと、煤になります。
- 2) 授業は5つの段階を踏んで実施され、上の本文を元に、第1段階では会話体の教材が、第2段階では寓話が教材として使用される。

第1段階 敷居

アンドレアスとユーディット

J (1) なぜ泣いてるの？

A 指にやけどをしちゃったんだ。

J 一体どうして？

A このりんごを火で焼こうとしたら、(2) 木炭が手の上に落ちてきたんだよ。

J 木炭は燃えてないわよ。(3) 燃えてる炭 (Glut, Pruna) だったんでしょう。

A そうだ、燃えてる木だった。

J つけ木だったのね。

A それにママが僕をぶったんだ。(4)

J どういう理由で？

A 火をかき回したから。

J もう泣かないで。

A (5) お願い。このりんごを火で焼いて。

J やってあげましょう。でもその前に聖書の中の話をかきかかせてあげるわ。

A 一つじゃだめだよ。三つ聞かせて。

私たちの神様は、すべてを焼きつくす火です。

人間は、塵であり、灰です。

私たちの生涯は、煙のように過ぎ去ります。

第2段階 門

I 寓話

(1) 真っ赤な火花は炎によって高く持ち上げられました。(2) いい気になった火花は、自分が星の仲間に入ったと思いました。(3) 煙突の真ん中ぐらいのところまで昇った時、火花は消え、灰となって下へ落ちました。(4) この話は傲慢と自惚れへの格好の戒めです。

II 寓話

(5) 夏に蠅に大いに悩まされた人がいました。(6) 我慢出来なくなってその人は藁に火をつけ、炎をかざして小屋の中を歩き回りました。(7) でも、火に対する注意が足りなくて、屋根の乾いた木に燃え移り、小屋が焼け落ちてしまいました。(8) 多くの人は小さな不便を避けようとして大きな被害を被る。(9) 煙から逃げようとする者は、火中に落ち込む。

上の例から、コメニウスが『前庭』や『扉』の本文をそのまま暗記することは必ずしも求めていなかったことがわかる。むしろ逆に、それぞれの章の語彙や表現を、より現実的な会話や一貫性のあるストーリーに移し替えて用いることを奨励していたことがうかがえるのである。こうしたことは現代の語学教育（筆者の場合は日本語教育）でも、教科書の作成や練習問題作り、さらには効果的なクラス運営に取り組んでいる教師ならだれでも、日常的にその必要性を経験することであり、これが350年以上も前の授業であるとはほとんど感じられない。

つまり10回の読み通しとは、同じ内容を単調に繰り返すのではなく、ある意味では手を変え品を変え、時に会話体、時に物語り、時に生徒同士の議論へと生徒の関心や現実に合わせて発展し、強制もなく意識することもなく繰り返しが重ねられ、そして自然に覚えていくという、そのまま現代にもびったりするような教授法なのだ、といってよいのではないか。

だがもし、「10回」だけが一人歩きし、何の工夫もなく実行されれば、押しつけ一方の退屈極まりない教授法となり、オーストリアで刊行された『教育百科事典』にあるような、コメニウス教授法の全面否定といってもよい批判⁽⁶⁾を食らうわけであるが、勿論それは、コメニウスの意図したことでは、全くなかった。

5. その後の『扉』と『前庭』、並びに残された課題

『扉』と『前庭』は、ほぼ20年後にコメニウスの手により大きく内容と形式が変えられる。そこにはコメニウスの事物教育への一層の傾斜がみられ、ローリー(1892)⁽⁷⁾によると、『前庭』については、5000の語彙が500のグループにまとめられるだけで、文の形では示されず、いわば関連語彙集のような形態を取っているという。改訂の趣旨や初版との違いについては、コメニウス自身が『最新の言語教授法』⁽⁸⁾に詳しく論じていて、たとえば、『扉』における新出語彙を1回しか出さないという初版の方針は間違いであるから放棄するとか、改定された『扉』では初心者により百科事典的知識を与え、より分析的に事物を提示するといった主張が述べられている。コメニウスの言語教科書観と授業方法は、それらをも踏まえて考察しなければ全体的な展望は得られないが、これについては稿を改めることにする。

注

1. *Janua linguarum reserata*. 藤田輝夫訳 (1991) 『開かれた言語の扉』(私家版)。
2. *Janua linguarum reserata vestibulum*. 藤田輝夫訳 (1991) 『開かれた言語の扉の前庭』(私家版)。
3. 井ノ口淳三著 (1998) 『コメニウス教育学の研究』, ミネルヴァ書房。
4. *De sermonis Latini studio didactica dissertatio*. 1638, Breslau. 藤田輝夫訳 (1985) 『ラテン語学習についての教授学研究』(私家版)。(Jan Kvačala: *Veškeré Spisy Jana Amosa Komenského*. svazek VI. zabreh, 1911 からの訳)
5. Lindner, Gustav Adolf (1876), *Johann Amos Comenius: sein Leben und Wirken*, Wien. pp. XXI-XXIII. David Bechner の論文名は “*Proplasma templi latinitatis*” (ein Vorbild des Tempels der Latinität)。なお、同一内容のことが、Robert Alt (1953) “*Der fortschrittliche Charakter der Pädagogik Komenskýs.*” (江藤恭二訳 (1959) 『ローベルト・アルト著コメニウスの教育学』明治図書, 96-98 頁) にも引用されている。
6. 拙稿「ハプスブルク帝国下のコメニウス」(2000) 『言語文化』37 巻, 98 頁。
7. Laurie, S. S. (1892, reprint 1972) “*John Amos Comenius: His Life and Educational Works*”, New York, pp. 173-187.
8. Jelinek, Vladimir (1951) “*The Analytic Didactic of Comenius*”, Chicago. pp. 58-66.